

第4回石川の発掘展「七尾湾の縄文世界」の記録

小嶋芳孝

平成14(2002)年8月1日(木)~8月31日(土)にかけて、第4回石川の発掘展「七尾湾の縄文世界」を当センターの研修室を会場に開催しました。今回の展示は、平成6(1994)年から平成12(2000)年にかけて実施した田鶴浜町三引遺跡の発掘調査成果をもとに、七尾湾周辺を舞台とした縄文時代前期初頭の様相を紹介することを目的に企画しました。展示にあたっては、穴水町教育委員会、金沢市教育委員会、福井県金津町教育委員会、藤田富士夫氏から資料を借用するとともに、多くの助言や教示をいただきました。



展示の概要 縄文時代前期初頭(約6000年前)には、現在よりも気温が2~3度暖かく、海面も3mほど上昇したと考えられています。これにより海岸線が陸地側深くに入り込み、海岸部では魚介類の宝庫となる遠浅の内湾が各地で形成されました。この頃になると人々の関心は海の幸に向いたようで、日本列島だけでなくロシア沿海地方や朝鮮半島など日本海に臨む各地の海岸部で貝塚を伴う集落が営まれています。



七尾湾でも三引遺跡をはじめとして縄文集落が海岸部に進出してあり、海を舞台に活発な活動を展開していた縄文人たちの様子が窺われます。七尾湾周辺では、約130ヶ所の縄文時代の遺跡が見つかっています。その中で、早期後半から遺跡が出現し、前期初頭(約6000年前)になると、入り江の奥など海岸の近くで14ヶ所の遺跡が確認されています。三引遺跡や甲小寺遺跡、佐波遺跡、通ジゾハナ遺跡の発掘調査により、縄文時代前期初頭から、海で貝や魚、イルカなどを捕ることが普及し、多くの人々が海岸近くに住むようになったことがわかつてきました。

三引遺跡の貝塚 三引遺跡の発掘調査では貝塚が発見され、人々が食べた動物や魚の骨、貝、土器、石器などが出土し、当時の生活が明らかになりました。

縄文人は周辺の自然の中から様々な動植物を獲得し、食料として利用していました。貝塚を調査すると、彼らが食料とした動物の骨や貝、木の実などがたくさん見つかります。これらを詳しく調べることにより、当時の縄文人たちの食料事情を明らかにすることができます。三引遺跡でも海や山で採った貝や木の実のほか、魚やシカ、イノシシなど様々な動植物を食料としていたことがわかりました。

三引遺跡の装身具 三引遺跡では、貝塚から約60点の石製装身具が出土しています。玦状耳飾や有孔

円盤には製作途中の資料もあり、貝塚の周辺で石製品が作られていたようです。有孔円盤はロシア沿海地方のチェルトヴィ・ヴォロタ遺跡で出土していますが、国内では初の事例です。三引遺跡の石製装身具は、玦状耳飾などの玉文化が日本列島に伝わった経路を考える上で重要な資料です。

富山県上市町極楽寺遺跡は縄文時代前期初頭の集落跡で、未製品を含む多量の玦状耳飾が採集され、縄文時代の耳飾製作遺跡として知られています。極楽寺遺跡の採集品が中国江南にある約6000年前の遺跡から出土する玦状耳飾と似ていることから、藤田富士夫氏は江南の玉製装身具の文化が縄文前期初頭の富山湾沿岸地域に影響を与えたという説を提唱しています。

福井県金津町桑野東遺跡では縄文時代前期初頭の墓地が発掘され、白色の石を用いた大型の玦状耳飾やヘラ状石製品が多数副葬されていました。この石材が日本では見られないことから、桑野東遺跡の装身具の製作地をめぐって大陸説や国産説など議論を呼んでいます。



玦状耳飾（桑野東遺跡）の展示



三引遺跡の貝塚ジオラマ



展示室の全景